



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	金子洋之『ダメットにたどりつくまで』（勁草書房、二〇〇六年）
Author(s)	中川, 大
Description	書評
Citation	哲学, 44, 241-245
Issue Date	2008-02-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35066
Type	departmental bulletin paper
File Information	44_RP241-245.pdf



《書評》

金子洋之『ダメットにたどりつくまで』（勁草書房、二〇〇六年）

中川 大

松田道弘は、『面白いトランプ・ゲーム』（一九九〇年、ちくま文庫、親本は一九八二年）で、マイケル・ダメットというイギリスの言語学者が、タロットは十五世紀に誕生して以来、十八世紀にフランスの神秘学者によってオカルティズムと結びつけられるまで、ゲーム以外の目的（たとえば占い）に使用されたことが一度もないことを、膨大な資料を駆使して証明して見せた、と書いている（二二―二二二頁）。

英国哲学界の重鎮マイケル・ダメットも、日本の読書子には（*The Game of Tarot*を原書で読む松田にとつてすら）、言語学者だとまちがえられるほどに無名の存在である。そしておそらくは、哲学に関心のある人々や、さらには職業的哲学者の多くにとつても、ダメットというのは多分に謎の人物であり続けているといえるかもしれない。なにしろ主著も論文集も異様に分厚く、三値論理の真理表くらい諳んじていなければ読んでもくれないと言わんばかりの圧縮された議論が、悪文の見本のような難解な英語で、ろくに出典参照も記さずに書き連ねられているのである。三舎を避ける者を責められまい。人生は短いのだ。

それでも、現存する哲学者についてのモノグラフが近年たくさん出版される傾向の英語圏では、ダメット哲学についての解説書がいくつか現われている。Darryl Gunson, *Michael Dummett and the Theory of Meaning*, 1998, Ashgate、Karen Green, *Dummett: Philosophy of Language*, 2001, Polity、Bernhard Weiss, *Michael Dummett*, 2002,

Acumen といったところが挙げられる。

しかし、日本語で読める文献となると心許ない。もちろん、行きずりのようにダメットに言及した文章であればいくつもある。とりわけ、比較的多く日本語に訳されている米国の哲学者ヒラリー・パトナムの「転向」に決定的な影響を及ぼした哲学者として彼の名が書かれてあったりするので、「これは重要な哲学者に違いない」と読者は印象づけられよう。しかし、そこでそれでは少し調べてみようかと思うと、当惑することになる。ダメットについていくらかでもまとまった記述がある書籍となると、ダメットの翻訳本の訳者解説や時間論関係の議論での論及をのぞけば、ほんとうに数少ない。竹尾治一郎『分析哲学入門』（一九九九年、世界思想社）第二章「検証主義の意味理論」（一六〇―一七一頁）や、野本和幸・山田友幸編『言語哲学を学ぶ人のために』（二〇〇二年、世界思想社）第Ⅱ部第一章「真理条件的意味論と検証主義の意味論」（一〇四―一二二頁、戸田山和久の筆になるもので、デイヴィドソンとの対比というかたちで論じている）くらいだろうか。飯田隆の『言語哲学大全』は、最終巻でダメットを扱うことをかねてより予告していたのだけれども、けっきょく果たされなかった。

そうした状況下で、ついにはどうか、やっと登場したのが、この『ダメットにたどりつくまで』である。前半でフレーゲ、直観主義、全体論について論じる構成は、右で挙げた書物のなかでは Green のものに似ているけれども、反実在論のプログラムを論じる後半での関心はむしろ、Weiss や Gunson に近いと思われる。いずれにせよ、日本人の手でまったく新たに書き下ろされたダメット論であり、こうしたモノグラフの出版に「たどりついた」ことそのものが特筆に値するということを、強調しておかなければならない。

この書物は、序論と付録をのぞけば五章からなる。第一章が「背景としてのフレーゲ哲学」、第二章が「直観主義から反実在論へ」、第三章が「論理の改訂はいかにして可能か」、第四章が「ダメットの直観主義」、第五章が「意味

理論とは何か」という表題をもつ。

著者によれば、ダメットの議論は次の三つの部分から成り立つ（八〇頁）。

- （１）論理の改訂を不可能とするタイプの議論を排除するための論証。
- （２）古典的な真理条件的意味論がなぜ維持できないかを示す論証（ネガティヴ・プログラム）。
- （３）直観主義論理がなぜ数学の論理として適切であるか、あるいは検証条件に基づく意味理論が意味理論としてほんとうに適切であるか否かを示す論証（ポジティヴ・プログラム）。

（１）の論点は第三章に、（２）の論点は第四章に、（３）の論点は第五章に、それぞれ割り振られている。第一章と第二章は、それらの議論を理解するための準備作業といつてよい。そして、私見では、この本の読みどころは第四章のネガティヴ・プログラムの説明、なかんずく「表出論証」(manifestation argument)と呼ばれる議論の解釈にある。思うに、この本でなされているような議論にあまりなじみがなく、冒頭から読み進めていくこうとして困難を感じた読者は、この山場の個所から、つまり第四章から読み始めてみるとよいかもしれない。第四章と第五章に目を通したうえで前半に立ち返れば、著者がどのような意図で一章から三章にそれぞれの議論を配しているのか、明らかになるだろう。

さて、ダメットの表出論証とは、「表出の要求」と二つの前提とから、古典的な真理条件的意味論を否定する議論である。表出の要求とは、「ある人がある文の意味を知るとき、その知識は、その人がその文を使用する、その使用において「表出 manifest」されなくてはならない」という、いわばダメット意味理論の公理にはかならない（一三八頁）。表出論証の第一の前提とは、実効的に決定可能ではない（その真理値を知ることができないだけでなく、そ

れを知る手段さえもちえない）言明が存在する、ということである（一三九頁）。表出論証の第二の前提とは、意味の知識が基底的な部分では暗黙の知識でなければならないという主張だ（一四三頁）。第一の前提は数学的事実に基づき、第二の前提は、ことばの意味を別のことばで置きかえて説明し続けようとする、循環か無限背進におちいることから明らかである。そして、実効的に決定可能でない言明を実効的に決定不可能たらしめている表現が、明示的な言語的知識として言語に導入されたとすれば、その言明はその導入のしかたからして決定可能であるのだから、つまるところ実効的に決定可能でない言明は、その意味が暗黙にしか知られえない言語断片にふくまれていることになる。そして、暗黙の知識を所有していることは、なんらかの能力（たとえば使用する能力）として示すしかないだろう。実効的に決定可能な言明については問題は生じない。真偽を決定するための実効的な手続きを行使できるなら、知識をもつことを示すことができる。しかし、実効的に決定不可能な言明については、そうはいかない。真偽はわからないし、それを知る手続きもない。したがって、真理条件を把握しても、それは表出の要求を満たさない。ところが、古典的な意味理論は、意味を把握することは真理条件を把握することにはかならないと考える。つまり、古典的な意味理論では、意味が社会的に伝達可能だという基本的事実を説明できない（一四六頁）。

著者は続いて、表出論証に対するマクダウェルらの批判を取り上げる。著者は、表出論証についてのマクダウェルらの理解を「標準解釈」と呼ぶ。標準解釈の第一の特徴は、表出の要求を認識論的な制約とみなすことである（一六六頁）。第二の特徴は、表出の要求でいわれる「使用」を、行動主義的な傾向性（言明への同意・不同意）と考えることだ（一六七頁）。著者によれば、これらはいずれもまちがった理解である。第一の特徴は、認識論ではなく言語哲学こそ哲学の基盤であるというダメットの基本的見解に背馳する。第二の特徴については、次のように述べられる（一七一頁）。

主張という脈絡において、言明内容を把握することは、単にその言明に同意したり、しなかったりすることではなく、状況に応じていつでもその言明内容を正当化できるということを含んでいなくてはならない。ダメットの「使用」や「実践」は、正当化や理由づけといったダイナミックなプロセスを含んだ「使用」であり、「実践」なのである。それゆえ、ダメットの言う「表出」は、そうしたダイナミックな言語実践の中での表出でなくてはならない。標準解釈とは違って、ダメット自身の考える「表出の要求」は、正当化のプロセスを含むよりより包括的な「使用」概念のもとで捉えられなければならない。

ここまで来れば、ダメットの問題がウイトゲンシュタインの問題圏に突き刺さっているのは明らかだ。著者も、ダメットのテキストに即してそれを指摘している（「犬はかれの主人が来週帰宅することを期待しているとなぜ言えないのか」(一七二―一七四頁)。表出の要求は、「語の意味とは語の使用である」という、ウイトゲンシュタインに結びつけられるテーゼの別形であるし、また、行動主義にきわめて似ていながら、決して行動主義でありえない議論とは、『哲学探究』の議論においてほかにあるまい。

著者は、「フレーゲと直観主義こそがダメットの考察を支える二本の柱」だとした序論への注で、ウイトゲンシュタインを落としたことに弁明し、ダメットが「ウイトゲンシュタインのどういう考えにどういう形で影響を受けたのかをはっきり特定するのは難しい」(二三三頁)と述べている。これは正直なところかもしれないけれども、この書物の最重要の読者を遠ざけることになったとしたら、やはり遺憾である。おそらくは、『哲学探究』の読者がこの本に最も刺激を受けるはずであり、評者としては、ウイトゲンシュタインとの対話・対決をこころざす人にこそ、この本を薦めたい。

(勁草書房、二〇〇六年、二五六頁)